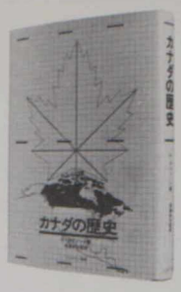

ケネス・マクノート著●馬場伸也監訳

『カナダの歴史』

ミネルヴァ書房

竹中豊

「カナダは今まで無視されてきた。」一七五八年、ニュー・フランス軍の副官ブガンヴィルは、本国フランスを批判してそうつぶやいた。文脈は異なるが、翻ってカナダに関する従来の日本の知的状況を考えてみると、彼のつぶやきはあながち他人事とはいえない。カナダは一見米国と地理的にも時代的にも類似していることから、しばしば薄められたアメリカとして皮相的に一蹴されがちであった。

この度出版されたマクノートの「カナダの歴史」(The Pelican History of Canada)はそのギャップをうめるがごとく、カナダの過去を理性的に掌握した絶好の著といえる。カナダ史を扱った邦語の文献は、これまでも散見された。しかし質量ともに、一九七六年までも扱った単行本としてのカナダ通史は、わが国では初めてである。

さて、歴史家が歴史をつくりあげる、従って歴史を研究する前にまず歴史家について知らねばならぬ、とはよく聞く言葉である。カナダ史の場合、これはより一層真実である。従来よりカナダ史は、仏系史家と英系史家によって書かれてきている。その結果、厳密な意味で一つのカナダ史はありえず、〝仏系カナダ史〟と〝英系カナダ史〟との二つのカナダ史が存在しているのが現実である。そして大まかにいって、前者のカナダ史にはケベック・ナショナリストとしての、又、後者のものにはカナディアン・ナショナリストとしての傾向が内在している。

マクノートは言うまでもなく英系史家であり、この「歴史」の中にもそうした色彩がひそんでいるのは、いわば当然かもしれない。例えば、本文三六三ページのうち、カナダ史の三分の一以上を占めるフランス統治時代は、わずか二八ページで片付けられている。

しかしそれは特に非難すべきことではない。むしろ歴史的事象に関し、重点の置き方の差があることを一応念頭に置いて読むと、全体としては、より冷静な筆致で描かれていることに気づく。

そこでカナダ史学を英系史家に絞って考えてみると、彼らに多大な影響を及ぼしてきているのは、トロント大学を基点とした歴史家達であろう。インニス、マッキニス、ローワー、クレイトン、ケアレスをはじめとして、マクノートもその代表格である。しかも後の三人は生粋のトロント人である。勿論、各自の視点は異なり、一定したトロント学派なるものを形成している訳ではない。だが敢えて彼らの共通点をあげれば、それはカナダ史の西部よりもオンタリオを中心とした東部志向型の史観にあるといえなくもない。従ってマクノートの論述も、アッパー、ローワー両カナダの統一の頃をはじめとして、コンフェデレーション成立前後の時代に関しては、ことさらにその筆が冴えている。政治力学的な動きが詳細に展開されており、一九世紀カナダは、マクノートの「歴史」のまさにハイライトといえよう。

他方、カナダ史がいかに米国史と根本的に異質であるかは、彼の次の言葉に要約されているといってよい。「カナダの社会・政治上の基本姿勢が、カナダのあちこちに存在するフロンティアでの経験から生まれたものである(アメリカ合衆国のフロンティアに関して断言されたように)と立証することは、たしかに不可能である。」(二一九―二〇ページ)(傍点筆者)。カナダ史には米国への併合の危惧、及び南の強国(あらゆる意味で)に対する警戒心が常につきまとっていた。従ってカナダの知的伝統の中には、一種独得な反米主義が潜在しているとしても、不思議ではない。マクノートを注意深く読むと、米国主義の過剰に対する懸念、及びカナダ主義への意欲を窺い知る事が出来よう。

邦訳に関しては、訳者達の配慮により各章中、原著にはない小見出しがつけられており、非常に読みやすくなっている。しかし邦文に関しては、若干疑問に思える箇所もなくはない。例えば一七世紀のニュー・フランス時代に新教徒は植民地定住に「厳しい制限を受けた」(二一ページ)(傍点筆者)とある。だが史実と原文から判断して、定住の「制限」ではなく実際には「締め出し」なのではあるまいか。又、「修道士ジャン・モンス」(二二ページ)は誤りで、「修道女ジャンヌ・マンス」である。カトリック色の強い仏系カナダに関する所で、一部を除き頻繁に「牧師」「カトリックでは使われぬ用語」としているのも誤解で、「司祭」あるいは文脈により「聖職者」としたい所である。さらに「チャールズ三世」(二三ページ)は、「チャールズ二世」が正しいが、これは印刷のミスということである。

とはいえ、これらはマクノートの本質、及び訳者達の尽力を決定的に損う程のものではない。同書がカナダ史研究の基本書であることには、誰も異論がないであろうからである。

(文化学院講師)

(日本カナダ研究会「ニューズレター」より転載)

近刊予定

リッカー、セーウェル著、馬場伸也監訳「カナダの政治」(ミネルヴァ書房)

カナダ大使館図書室案内

○「医師ノーマン・ベチューンの偉大なる生涯」(T・アラン、S・ゴードン共著、浅野雄三訳、東邦出版社)

○「世界の地理教科書シリーズ4 カナダ―その国土と人々」(トムキンズ、ラウト、ビンセント、ウォーカー、ラスト共著、山口岳志訳)

○「日本の移民―日系カナダ人に見られた排斥と適応」(新保満著、評論社)

○「フランス系カナダ問題の研究」(伊藤勝美著、成文堂)

○「オーカミよ、なげくな」(ファーレー・モーワット作、小原秀雄、根津真幸共訳、紀国屋)

○「イギリス(系)カナダ文学史概説(カナダ研究シリーズ第九巻第一号)」(コンラッド・フォルタン著、上智大学カナダ・センター)